

も、藥物は草類最多きが故に、草を本とするといふ意にて、本草とは名けしものならん、西洋にて、昔多厄河といふは、此に植學と譯して、唯植物のみに限りて、効能の有無と、藥の用事と不用とに拘らず、博く搜索し、辨識記載し、尙且植物之生々、長生開花結實するの理を論ず、玄かれば植學と本草とは、迥に別の學問なり、

西洋にては、別に草木金石蟲魚の類物々なべて吟味する一種の學問ある事、○中略

西洋にも、アポテケルマンストとて、藥品のみ論じて、唐山の本草學にあたる學問のある事、西洋には、右三有學の外に、アポテケルマンストと唱ふる學問ありて、専ら藥物の効能と等的美惡修治製法など宗とする一科あり、アポテケルマンスト、是に藥鋪と譯して、藥鋪の學問なり、然れどももと三有究理學の内にて、藥鋪庸醫の爲になるべきことを拔萃せし者なるゆへ、醫家の一派ともいひ難し、是故に、唐山の本草に得とはあたらす、然れども唐山の本草書と云もの、効能美惡修治製法をいふを宗とするを見れば、姑くこれを本草學と思ひ玉へ、

〔醫範提綱 題言〕一和蘭ノ醫書ヲ概シテ云ヘバ、○中略本草物産ノ書ニハ、凡ソ草木金石土鹽ノ類ヨリ、禽獸蟲魚ニ至ルマデ、醫藥ニ供シテ効驗アルモノ、衆邦ノ生ズル所ヲ彙集シ、旁ク求メ、歴ク試ミテ、主治功能ヲ明ラメ、培養土宜ヲ詳ニシ、寫真ノ圖畫ヲ銅版ニ鏤メ、形狀ヲ察セシム、或ハ藥品ノ西域ニアリテ、東方ニナク、彼ノ地ニ繁殖シテ、此土ニ培栽セザル類ハ、性質氣味功用ヲ考ヘ、徵シテ、活用スベキノ理ヲ明ニス、

本草家

〔日本書紀二十七〕十年正月、是月、○中略以大山下授、○中略焯日比子、贊波羅、金羅、金須、藥解鬼室集信、藥解以

小山上授、達率德頂上、藥解吉大尙、藥解

〔續日本紀二十四〕天平寶字七年五月戊申、大和上鑒真物化、和上者楊州龍興寺之大德也、○中略又以諸藥物、命名眞僞、和上一々以鼻別之、一無錯失、